

十津川大踊り：ユネスコ無形文化遺産

(Web)

十津川大踊りは、UNESCO 無形文化遺産に登録されている、「風流踊」と総称される民俗舞踊のこの地域の様式です。風流踊は、伝統的な歌に合わせた軽快なステップを特徴とする群舞で、鮮やかな浴衣（summer kimono）をまとった地域住民によって踊られます。

十津川の集落で踊られる大踊りは、人通りの多かった熊野の巡礼路を通过这个地域を旅していた人々によって伝えられたとされます。大踊りは盆踊りという夏の舞踊会の伝統の一部です：盆踊りには、先祖の霊を迎え共に踊るというスピリチュアルな側面、恋人と出会う機会となる社会的な側面、そして娯楽としての側面など、複数の機能があり、参加者は着飾った姿や踊りで注目を競います。

大踊りは色鮮やかな提灯に照らされた広場で開催されます。手で持った太鼓の拍子に合わせて、男女の歌い手が歌を歌います。振り付けは上の世代から受け継がれ、本番に向けて何週間も練習されます。踊りが続く中、かき氷や綿菓子を売る屋台が小さな子どもたちを喜ばせます。かつてはほとんどの集落で日没から夜明けまで続く踊りの行事が行われていました。しかし、現在大踊りの伝統を継承しているのは武蔵、小原、西川、湯之原の4地区のみで、これらの地域の踊りも大抵深夜12時を過ぎると間もなく終わります。

長年の間に、各集落は独自の音楽と踊りのスタイルを確立し、歌の一部は共通しているものの、テンポや振り付けは大きく異なっている場合があります。例えば、武蔵や小原の踊り手は、数多くのアップテンポの曲に合わせて色鮮やかな小さなやぐらの周りを回るのに対し、西川の踊り手は、中央にやぐらを置かず、踊り手と太鼓の打ち手が直線の列をなして平行に並び、ゆったりとした重厚なリズムに合わせて動きます。房のついた太鼓台や竹竿の先に下げた提灯など、小道具は集落ごとに異なります。舞扇のようにどの集落でも使われる小道具もあります。各集落には独自の曲目リストがありますが（武蔵の場合は 36 曲）、毎年全曲が上演されるわけではありません。かつては 1 時間以上続いた曲もいくつかありましたが、それらは現代に合わせて短くされています。

毎夏、8 月 13 日から 15 日には、これら 4 地区および他の 6 集落で踊りの行事が開催されます。観光客も、見学はもちろん、参加して様々な踊りを見様見真似で踊ってみるのも大歓迎です。その翌週末には、ホテル昴の横の広場で、地元の踊り手が集まって演目を踊る短時間のイベントが開催され、その後花火大会が行われます。これらの行事はいずれも、この古くから大切にされてきた伝統を楽しみつつ、その継承を応援する絶好の機会です。